

地域福祉学科における「戦争体験特別講義」実施報告

岡 京子¹⁾*・松本 百合美¹⁾・三上 ゆみ¹⁾

1) 新見公立大学健康科学部地域福祉学科

(2019年11月20日受理)

地域福祉学科が「高齢者の生きてきた時代とその体験を知ることで、高齢者理解につなげる」という目的の下、2010年から実施してきた「戦争体験特別講義」は、3人の語り手によって9年間続けることができた。3人の方々の語りを紹介し、介護福祉士養成教育における高齢者理解において貢献したことを報告する。
(キーワード) 戦争体験、高齢者理解、介護福祉士養成教育

はじめに

新見公立短期大学地域福祉学科では、介護福祉士養成課程の1年生を対象に、2010年度より2018年度まで「戦争体験特別講義」を行ってきた。戦後74年が経ち戦争を体験した人々が高齢化していくなかで、兵士として戦争に駆り出された世代が大正生まれまでの人たちだとすると、その体験を語れる人は、日本の総人口の1.4%^{註(1)}となってしまったことになる。こういった状況下で、戦争体験の〈語り〉をどう継承するかという点については、デジタル・アーカイブの活用や、継承者の育成といったことが進む一方で、平和教育実践としての側面においては、その困難性も指摘されている¹⁻⁵⁾。

本学科では、2010年当時、戦争を体験した方からの学生に聞かせたいという申し出を受け、特別講義を開始した。特別講義の目的として「高齢者の生きてきた時代とその体験を知ることで、高齢者理解につなげる」ということを掲げた。

本稿では、9回の実践において語られた内容を紹介し、介護福祉士養成教育とのかかわりについて若干の考察を加え、実施の記録としたい。

特別講義の概要

9回にわたる特別講義では、計3人の方々に登壇いただき、お話をうかがった。

2010年から2012年までの3回は、新見市神郷釜村在住の竹本敏美氏(大正10年生まれ)、2013年度は、新見市高尾在住の上仲林造氏(大正10年生まれ)、2014年度から2018年度までの5回は、新見市草間在住の森光榮氏(大正13年生まれ)であった(表1)。森光氏には、娘さんの菅田桂子さんが付き添われ、お話の補足やお母さまの戦争体験を加

えて話してくださった。

参加者は学生と教員であり、9回で延べ約500人にのぼる。

表1. 講師と日程

年度	日程	講師
2010	10.7(月)	竹本 敏美氏
2011	10.25(火)	
2012	8.3(金)	
2013	8.2(金)	上仲 林造氏
2014	7.31(木)	森光 榮氏
2015	8.6(木)	
2016	8.5(金)	
2017	8.8(火)	
2018	8.3(金)	

(1) 竹本敏美氏による講話

竹本敏美氏による講話の概要を以下に示す。

昭和6年から昭和20年までを「15年戦争」とも呼ぶ。小学校3年生の時に校長先生から聞いた満州鉄道爆破事件から始まり、昭和16年に出征。昭和19年3月サイパンに向けて船団を組んで出港、サイパン沖でアメリカ潜水艦の魚雷攻撃を受け、護衛艦1隻と輸送船1隻が沈没した。サイパンに上陸し、5月ヤップ島守備のためサイパンを出発。ヤップ島に上陸してから昭和20年8月14日まで敵の空襲、艦砲射撃、戦闘機の低空飛行による機銃掃射を受け、食料補給の無い中での苦しい戦いを18か月。その時のことは話したくない。

その間48人の戦友が戦死した。昭和20年8月15日終戦。16

*連絡先: 岡 京子 新見公立大学健康科学部地域福祉学科 718-8585 新見市西方1263-2

日、終戦を知る。12月、敗戦のくやしき・友を残して帰国する残念な気持ちで涙ながらにヤップ島を後にする。12月18日神奈川県浦賀に上陸。無事復員し帰郷。その後、結婚し家庭を持ち、3人の子育てをしたが、ずっと気になっていた「ヤップ島へ残してきた戦友」への思いが結実。73人の同志とともに昭和55年1月29日、サイパンにお参りし、念願の地ヤップ島において慰霊祭を挙行了した。

戦争の話はもういいと言う人もいる。しかし、多くの方がたくさん戦争に送り出され、終戦後にはソ連から侵略され、満州に子供を残して引き上げざるを得なかった人もいる。シベリアに抑留され、寒さと飢えと重労働でたくさんの命も失われた。何とか引き上げてきた兵隊も、そのような苦しい体験をし、戦後67年で記憶もすでに忘れ去られようとしている。こうした体験を語れる人は少なくなっている。私も91歳を超え、若い方、また後世に語り継いで、二度とあのような戦争が起こらないようにと願い、また多くの戦死された方、食料がないため餓死した兵隊、栄養失調や病気で亡くなった兵隊、軍艦や戦闘機が撃沈、撃墜され海に沈んでいった兵隊。この戦争には必ず勝って再び親子兄弟、妻子がいる故郷の我が家へ帰れると夢見ながら戦った兵隊が、ついに最期を遂げ遺体を埋葬され、また苔むす屍、草むす屍、白骨となり今日に至るまで、誰も迎えにも墓参りにも来てくれるものもなく、一人さみしく無念残念の思いで彷徨しておられる多くの英霊に対し、少しでも報いることができるのではないかと思います、こうしてお話をさせてもらっている。

戦争は絶対にやってはならないことである。被害者も加害者も多くの犠牲を払うものである。



写真：竹本敏美氏による特別講義

講話の最後には、戦争で亡くなられた旧新郷村の73人のお一人お一人の名前を暗唱され、靖国神社に展示してある特攻隊の若者の遺書を暗唱された。また、『戦友』の歌詞を自分たちの身近な歌詞に替えて自ら作られた歌を聞かせて下さった。

(2) 上仲林造氏による講話

上仲林造氏による講話の概要を以下に示す。

昭和18年12月1日、「学徒動員」として岡山の部隊へ配属された。昭和19年12月、予備士官学校を卒業して見習士官となり、関東軍に配属された。見習士官であっても実戦経験を持つ下士官や兵には頭が上がりず、酷寒零下20℃から40℃の夜間でも、ソ連軍の参戦に備えて演習を重ねた。しかし、関東軍でもこの頃は野砲も戦車もない有様だった。

昭和20年8月、ハイラルで相変わらず地下陣地を構築している中、目の前でソ連軍機の銃撃により弾薬輸送隊が全滅した。8月13日東部満州へ応援に行く旅団が編成され、私もこれに加わった。8月15日満鉄の貨車の中で戦争が終わったのではないかという噂が流れ、騒然とした中でハルビン駅に到着した。

ハルビン駅前広場で、ソ連軍将校から「戦争は終わった。日本は負けた。」と告げられ、武装解除を受け、ソ連軍の捕虜となった。20年11月にソ連に入国。約一か月がかりでモスクワから300km程南のタンポフという町で1年間、そこからまた300km程東のボルガ湖畔のエラブカという町に移送され1年間抑留、昭和22年11月に舞鶴港に復員した。

私と同様、ソ連軍に抑留され、強制労働させられた中で、6万余の軍人が酷寒のシベリアで死亡し、いまだに遺骨も墓地もわからない人も多い。若い人たちはこれが無駄死にだというものもいるようだが、それでよいものだろうか。大興安嶺のハイラル陣地では数千名の同胞が戦死。終戦間際に援軍に向かった東満でも、予備士官学校の同僚が歩兵の突撃隊長として数多く戦死した。昭和18年、学徒出陣とともに入隊した同期の桜約700人。半数が福知山予備士官学校へ行き、大部分が南方諸島を転戦し、3分の2以上が戦病死したと聞く。私が行った関東軍予備士官学校の同僚の生存者は約60名と推測される。これを今なおメモも見ずにいえるということは、私にとって生涯のうちで一番厳しい



写真：上仲林造氏による特別講義

経験だったからだろう。

昭和6年の満州事変から始まる日本軍のアジア諸国に対する侵略行為と、言語に絶する戦禍を与えたという認識の上に、大きな犠牲を払ったこの世界で、戦争がなくなる日を請い願わずにはいられない。若者たちはその事実を想起し、戦争と平和に対する考えを確立してほしい。また、戦争体験者の記憶もやがて薄れていくが、「戦争体験」は忘れても、「戦争の歴史」は絶対に忘れてはいけない。

(3) 森光榮氏による講話

森光榮氏による講話と菅田桂子さんによる補足のお話は、許可をいただき資料として文末に全文を掲載させていただくことができた。概要を以下に示す。

私が小学校を卒業するころ、支那事変が勃発した。提灯行列や日の丸の旗で勝利の祝いをしたのを覚えている。昭和19年に徴兵検査を受け、「森光、甲種合格」と判を捺され大変嬉しかった。

昭和19年9月に岡山48分隊へ入隊。その際には、大勢の人に見送ってもらい、千人針や日の丸への寄せ書きを持って出て行った。入ってみると厳しい社会で、階級も厳しかった。「お前の命は1銭5厘（死亡通知のはがき代）」と上官から言われ、死んで体が散らかっても（誰なのか）分かるように、小判型の番号の入った札を首にかけよう渡された。

蒜山で訓練を受けた。お腹がすいてかなわなかった。村の祭りのご馳走を父親が蒜山まで持参してくれたが、会うこともご馳走を食べることもできなかった。貰った菓子を夜中に全部盗まれるといった体験もした。腹がすいている兵隊は盗んで食うのが日常だった。

沼津へ移動し、アメリカが攻めて来た時に、迎え撃つ陣地を作った。そこではB29が落とす油脂焼夷弾による空襲を体験し、寺に並べられた死人の不寝番をした。赤い小さなアリが死体にたかっていたが、どうしようもなかった。それでも「日本は負けはしない」と思っていた。

「8月15日に重大な放送があるから聞くように」という命令で、ラジオで戦争が終わったということを知った。そして、毛布一枚貰って帰ってきた。本当に人権を無視した、みじめな戦争だった。

家内も外地から引き上げる際に、過酷な体験をしている。その家内も脳梗塞で倒れ、自宅で介護をしてきたが、今年、不帰の人となった。私は、前々から地域発展の役に立ちたいと様々な活動をしてきた。これからどれだけできるかわからないが、続けていきたい。

<菅田桂子さんからの補足>

母の体験を伝えたい。朝鮮からの引き上げの際、ソ連兵と現地の人によって、乗っていた貨車が止められた。「女を出せ。そうしたら動く」。緊迫する中で、娼婦をしてい

た人が3人、「自分たちが行く」と自ら貨車を降りた。

母や叔母から、「自分たちが生きて日本で生活できているのは、あの3人の人たち（聖女）のおかげだ」と聞かされてきた。母は娼婦をさげすんでいたことへの後悔、恥ずかしさもち続けていた。父や母から聞いた「一人ひとりを大切に。人のことを考えて行動するんだよ」「どの人も尊い存在だ」という言葉は、私の心に深く入っている。



写真：森光榮氏による特別講義

介護福祉士の養成教育と戦争体験

本学科では、「高齢者の生きてきた時代とその体験を知ること、高齢者理解につなげる」ということを目的に戦争体験特別講義を行ってきた。

戦争体験特別講義は、本当に多くのことを考えさせられ、教員にとっても背筋の伸びるような、自らを内省的にさせるような体験であったが、ここでは「高齢者理解」という点から若干の考察をする。

学生が将来、介護福祉士となってから出会う高齢者は、多くが要支援・要介護という状態の高齢者である。その人たちに対する支援を計画し実践することが介護福祉士の業務であるが、高齢者一人ひとりの支援を考えるうえで、「その人らしさ」を知ることが重要である。その人が、どのような人生を生きてきたのか、何を誇りとしておられ、どのような日常を送りたいのか、といったことが利用者主体の介護の実現に大きく関与するからである。しかし、介護福祉士との出会いにおいて、すでに<弱者>であり、支援されるという<受け身>の立場にいる高齢者が、介護福祉士と真の意味で<出会う>ことは容易ではない。

学生は、1年次の9月に初めての介護福祉実習を体験し、<受け持ち利用者>として一人の高齢者と出会い、介護上の課題を抽出するという学修をする。その実習の1か月前に、戦争体験特別講義において、語り手である高齢者に会うことになる。そこで出会った、90歳を過ぎてなお、同郷の戦死者78人の名前を暗唱される姿、メモも見ずに膨

大な記憶を語られる姿、着席をお願いしても起立姿勢を崩されない姿は、語られた内容とともに、圧倒的に語り手の強い意志と願いを象徴し、私たち聴く者の心を揺さぶった。

語り手のみなさんによって語られた彼らのエピソード⁽²⁾は、それを聴く私たちの心をも揺さぶり、息を呑ませた。戦争によって大きく影響された人生である。戦争という状況下で、あるいは戦後の70余年をそれぞれの方が、どのような思いで生きてこられたのか、何を大切にされてこられたのか、語られた事実のみでなく、声のトーンや擦れ、表情や姿勢といった、動的な語り行為に触れたことは、テキストデータとして触れる事実とは違い、重みと熱量の伝わる体験であった。

介護の現場で、様々な障がいによって、自らを語れなくなった高齢者の「その人らしさ」を理解するためには、パズルのピースのように断片的に存在する情報を集め、組み合わせながら絵柄として浮かび上がらせていく作業が欠かせない。どんなピースに気づくことができ、拾い上げられるか・・・ということが、介護福祉士に求められる力の一つでもある。

学生は、戦争体験特別講義を通し、高齢者と「強い思いや願いを持った人」として出会った衝撃を最初のピースとして心に刻み、＜要介護高齢者＝弱者＞というステレオタイプの高齢者観から脱却した介護福祉士として成長してくれることを確信している。

謝辞

9年間の特別講義において、講師を務めてくださった故竹本敏美様、故上仲林造様、森光榮様、菅田桂子様、ならびにご家族のみなさまに感謝いたします。また、森光榮様、菅田桂子様には講演録の作成にあたり快くご協力いただき、原稿修正の労を引き受けていただきました。重ねて深く感謝いたします。

<資料>

2018年度 地域福祉学科「戦争体験」特別講義 2018年8月3日 13:00～14:30
新見市草間 森光 榮さま ・ 菅田 桂子さま

それでは、お話しする前に、私は今年の4月の22日の日に、脳梗塞を患って、救急車で川崎病院の方へ運ばれ、お医者さんの特別な計らいで、このように皆さんの前に立てることができました。今日もこれからお話しする中に、いろいろと言葉が出てこなくて、皆さんに大変ご迷惑をかけると思いますけれども、今まで経験したことを皆さん方にお話をし、務めを果たさせていただければと思っております。

私が生れましたのが、関東大震災が大正12年にあったその翌年、13年の1月に生まれました。現在、年が94歳。まあ、ここまで生かしていただいたのです。それでは、生まれたころの状況をちょっとお話ししたいと思っております。

私が小学校に入りますまでに、現在の伯備線、それが、昭和2年ごろに開通したと思うんです。私もお祖母さんに連れられて汽車を見に行き、線路のほとりまで出て手を振ったのを覚えておるような感じがします。小学校へ入ることになったのが、昭

注釈

- (1) 総務省統計局「日本の統計2019」を用い、1925年以前に生まれた男性の人口から算出。
- (2) 社会学者のN.K.デンジンは、「個人の人生に刻印を記すような経験は、個人を変える潜在的な力を持っており、それは＜エピソード（劇的な感知）＞である」とし、そこから解釈的相互行為論の議論を展開させている⁽⁶⁾。

参考文献

- 1) 宮本聖二：デジタル・アーカイブによる学び—戦争体験の伝承と語りの継承、第13回情報プロフェッショナルシンポジウム予稿集、2016（0）、121-126、2016。
- 2) 村上登司文：戦争体験継承に対する当事者意識を育てる教育の考察。京都教育大学教育実践研究 紀要、18、173-182、2018。
- 3) 外池智：戦争体験「語り」の継承とアーカイブ（6）—広島市「被ばく体験伝承者」・長崎市「家族証言者」を事例として—。秋田大学教育文化学部研究紀要 教育部門、74、67-98、2019。
- 4) 高江洲昌哉：戦争体験者の話は「退屈」ですか？—青山学院高等部入試問題・再読—。青山スタンダード論集、11、99-111、2016-01。
- 5) 古波蔵香：戦争体験者への共感が持つ教育実践上の意味と課題。大阪大学教育学年報、22、15-26、2017。
- 6) N.K.デンジン。関西現象学的社会学研究会編訳：エピソードの社会学 解釈的相互作用論の核心。マグローヒル、8-9、1992。

和5年。その当時の小学校1年生が初めて手にした教科書は、「ハト・マメ・マス・ミノ・カラカサ」と書いてある教科書で、ノートもたくさんなかったので、石板という道具を買っていただいてそれに書き、先生が石板に白墨で○を入れてくださり、その石板を我が家へ持ち帰っていました。それが、その当時の私たちのノートの代わりなんです。

そのような生活をしておりますうちに、小学校を卒業する頃、支那事変が勃発したんです。小学校6年生ぐらいのときに、支那事変が勃発して、「日本、勝った、勝った」ということで、私も提灯行列や、日の丸の旗を振りながら地域で祝いをしたのを思い出しております。

小学校を卒業して、昭和13年に新見の高校へ参ります。新見高校へ入ったのが昭和13年の4月。10日も経たないうちに、新見の火災に遭いました。学校が全部焼けてしまいました。今の北高、南高も全部焼け、小学校も火事に遭いました。ひとしきり、安養寺という新町の上のお寺で勉強しました。しばらくして、思誠校の運動場のほとりに仮の校舎が建ち、そこで1年ほど生活をしました。それから本校舎が建ったので入り、新しい校舎で卒業しました。その年が昭和16年。アメリカとの戦争の始まりのときに、高校を卒業しました。

その当時はもう、駅員さんも、男の駅員さんはおられないようになった世の中です。女の人が改札をしたり、いろいろ駅の仕事をしておられた。学校の男の先生もみんな戦争に駆り出された。女がその代わりに仕事をしなければならないようになってきたのです。私は長男に生まれておりましたので、家の百姓をしようと思っておりましてところが、先生が足りないというようになってきて、私も高校を出とった関係で、小学校の先生を仰せつけられました。

そういう戦争の中で、昭和19年に徴兵検査があったわけです。1年学校に勤めたあとすぐ、徴兵検査を受けることになりました。その当時は、全員、頭の前から足の先まで、本当に残さんように調べられました。足の裏の扁平な人はバケツに水を入れて、足跡をつけて調べていく。それは、歩兵としては恵まれないので、馬に乗せる騎兵に回す。その他も、残さぬように検査をしてくださって、私は徴兵官から、「森光、甲種合格」という判を捺されました。私も大きな声で、それに返事をしました。大変嬉しかった。検査の結果は、甲種、乙種、丙種というような段階がありました。私は甲種ということで、大変嬉しかった。

いよいよ私も、昭和19年の7月に岡山48分隊、今の岡山大学のある跡へ兵舎があり、今総合グラウンドになつてきますところが演習場でした。そこに、9月1日付けで入らなければならなくなって、大勢の人に見送ってもらい、「元気で行って、勝って帰ります」言うて出ていきました。みんな、入営するまでに神に頼らにやなりませんので、足見、土橋、落合、正田、新見と八幡さまという八幡さまをみな回って歩き、みんなの力で守ってもらい怪我をしないようにと布に千人針をしていただいたり、日の丸の旗に「死なさん」言うて、大勢の方に名前を書いていただき、それを肩にして、岡山48分隊へ入りました。

ところが、入ってみるといって、なかなか規律厳しい社会でした。今の岡山大学の兵舎の中へ入ったとき、物がなくなったら、なくなった者が叱られる。非常に階級も厳しい社会の中でした。入っている中には俳優さんもおられるし、散髪屋さんもおられる。学校教員、大工さん、左官さん、いろいろな職業の人が集まっておられた。手に職を持った人などは、上官から「ちょっと来てここを直して、ここをこうしてくれ」と言われる。散髪屋は散髪する。演芸会があるときには俳優さんが、太夫の人も歌を歌って慰労する。そういうような生活を1週間ほどやりました。

そうこうするうちに、戦地に行くので持ってきた衣服類を全部、家の方に送ることになりました。そのときに、部隊から渡されたのが、死んでも体が散らかっても分かるようにと、小判の形に番号の入ったものを渡されました。それを首にかけておけということです。夜中に、「今から部隊は動く。そのつもりで」と告げられ、岡山の駅まで出ていきましたけど、どこへ連れていかれるのやらさっぱり分からない。とにかくついてこいということで、岡山の駅へ出て汽車に乗せられた。全部窓を下ろすように言われ、鎧戸も全部下ろしました。伯備線へ乗せられたのですが、敵国のスパイに気付かれないようにそうしたのです。

一列車の中に押し込められて、どこへ行きよるか分からないけど、何かこう思えたんです。伯備線を上がっていったような感じがしたんです。そうしたら、途中、新見の駅で止まりました。そこでは、国防婦人会という婦人の方々が湯茶の接待をしてくださった。そのときに私の知っている、新見の文正堂の奥さんなどが、お茶をついでくださった。私は、ああ、これはどこへ行きよるか分からんが、新見まで帰っていると思った。それから集荷したら列車も発車して、伯備線を北の方へ上がって、大山の手前の駅、根雨で下ろされた。

そこからいよいよ、歩くことになった。どこへ連れていかれるのか分からない。暗い中で、前の人の背を後ろから眺めながら、山の中へ山の中へと入っていった。疲れてしまったので、休憩となった。そのとき、どこかの家の軒下へ入れていただいて、仮眠をした。ひとしきり寝ると、「出発」と言う声がかかり、また歩き始めた。夜が明けたときには、大きな想像のできないようなマメが両足に出ていて、もう痛くてもう痛くて。命令があると、それに沿うていかなければならないので、痛いのを我慢して歩き、蒜山へ着きました。

そうして蒜山へ着き、毎日の仕事は、岡山から兵隊が重機関銃、ボタンを押せば30発から40発ぐらいの弾が出る重機関銃を運ぶ係に選ばれた。2頭の馬の世話係にもなった。私は百姓をしておりましたから、牛は結構扱っていたが、馬を扱ったことが

なかった。馬は上下に歯がある。しかも、馬は蹴る。それで、これは、後ろに気をつけなければならない、噛みつく、という馬には尻の尾のところに赤い紐がつけてある。馬で重機関銃を運ぶため、世話をしないとイケない。

そのうちに、私は、外地へ出されるんじゃないかと思うようになった。竹でこしらえた船のようなかたちの上から飛び降りる訓練をしきりにさせられた。次には、戦車が押し寄せてくるのを想定して、スコップの小さいのを持って、寝て穴を掘る訓練をした。穴の中へ隠れて、今のブルドーザーのようなキャタピラのついた、そのキャタピラへ、爆弾をほうり込む訓練をさせられた。寝てスコップを使うというのも、大変苦しかった。馬の世話や訓練で、お腹が空く日々、腹が減って腹が減ってかななかった。みんな残飯を食べたり、班長さんがご飯を残されれば、残ったものをみんなで分け合って食べていた。

そうしておるうちに、私の村でお祭りがあり、父親が祭りのご馳走を持って来てくれた。それも蒜山に行くのに、姫新線で勝山まで行き、勝山からバスに乗って、蒜山へ行くというように時間がかかった。祭りのご馳走を持ってきてくれた父親に会って話ができると思っていたができなかった。そのとき、今年入った初年兵は言うことを聞かないということで、隊長さんから私らは叱られていたのです。知っている上官から、「親父さんが祭りのご馳走を置いて帰ったから、あとでもらいに行きなさい」と告げられ、叱られた後、馬に餌をやり、夜の9時前になって、ご馳走をもらいに行ったら、「おまえが取りに来ないから、みな食うてしもうた」と言われた。上官も、お腹が空いたたんでしょ。取りに来ないから言うて、遠くから持って来てくれたものを皆食べてしまう、そういうところでした。蒜山に、3カ月ほどいました。

寒くなり、私も風邪の症状が出てきた。「森光。風邪のようだから、車で岡山の病院へ、陸軍病院まで乗せてやるから行け」と、菌保有者ということで、岡山の陸軍病院へ1週間ほど入りました。その後寒さのために、蒜山原の兵隊は、全部岡山へ帰りました。そのとき私の帰ったところは、岡山の東の県商（現在は岡山県立岡山東商業高等学校）でした。

馬の世話をせにやいけませんので、馬屋の掃除、寝糞は全部外へ出す、馬の脚の裏の手入れ、顔も尻にも油を塗って綺麗にする。そうして、今度は馬の運動をさせる。「乗れ」と言われたら私も乗らなければいけませんので、おそろおそろ、馬の手綱を持って乗りました。上官は上手なので、「前へ」と言うて、馬はカッカ前へ出る。私は下手なので落ちてしまう。すると、馬はパッと足を止める。噛みつくような馬もおりますけども、牛よりも馬は利巧です。岡山でそういう生活を送りました。

お腹は空きました。もう、本当にお腹が空いて、何でもいい、食べるものがあれば食べたいということがたびたびありました。楽しみにしていたのは、食料を取りに行くときでした。一斗樽のようなものにご飯を入れたり汁を入れたりして、棒の真ん中にぶらさげて両端を二人で担ぎ運びますと、後ろの者は樽の中へ手を入れて、むすびをして自分のポケットへ入れ、中には口へ入れる人もいます。そして二人で飯運びをして帰りますとすぐ便所へ入って、むすびを食べる。それが一番楽しいことでした。そういう暮らしを岡山でしました。馬の運動と、もちろん兵隊の銃器の手伝い、手入れというようなことを一生懸命しました。

しかし、ついに、神戸の方へ行けと命じられました。当時貴重な生ゴムを空襲でやられないように、安全な場所に移すためです。そこで、神戸の成徳学校へ参りました。そこでも、兵隊はみんなお腹が空いていました。私の親戚がちょうど神戸にいたので、衛生兵にちょっと連れて出してもらえないだろうか頼むと、連れて出てくれました。衛生兵は腕章をしているので、兵門が通れます。私も神戸の親せきへ行きました。ご飯をしっかりと食わせてくれ、菓子屋をしておいたので、菓子を袋へ入れて持たせてくれました。成徳学校へ帰り、鉄兜の中に菓子を入れて枕元へ置いて寝ました。夜が明けてみたら、鉄兜の中に入れていた菓子はありませんでした。兵隊は腹が減っているので、盗んで食うのです。

そのころ、大阪の空襲がありまして、神戸から東を見ると空が真っ赤になっていました。こうして、生ゴムを安全な場所へ移し、岡山へ帰りました。

今度は静岡県の沼津へ、部隊は移動しました。沼津のものと香貫山という山へ、陣地を作るために移動したのです。機関銃を入れる穴掘りをしました。8時間交代で、電削という削岩機を使って、駿河湾の山の香貫山の方から穴を作って、そこへ機関銃を入れて、向こうから攻めてきたら撃つための、駿河湾の陣地づくりをしたのです。そのころ、アメリカの飛行機が日本の空を飛んでいました。それで、アメリカの飛行機を狙って、日本の高射砲、飛行機を撃つ大砲をどんと撃つんですけど、日本の弾はアメリカのB29に届かない。アメリカのB29の方が高いところを通っているのです、日本の高射砲が届かないのです。

そのうち、アメリカのB29が来て、昼夜、上から焼夷弾を落としました。夜に落とされると、沼津の町が昼のようになってしまいました。日本では、雨戸を閉めて、電球の光が外へもれないようにしていました。そうすることで、みんなを守れるという教育をしておったんですけど、B29が焼夷弾を1つ落とすと、沼津中が昼のようになってしまっ、人が逃げているのがよく分かるのです。私は、馬を焼夷弾から守りました。

油脂焼夷弾というのは、油なので、水の際まで綺麗に燃えてしまう。焼夷弾の落ちたところは、火の海になってしまうのです。夜が明けて、私がおりました瑞巖寺というお寺の境内へ、死人を次々運んできました。死人が3列ぐらい並んでいました。何かをかぶせてあげたらいいんですけど、かけるものがない。全部むき出しで転がしてありました。私はこの寺で寝起きしとった関係で、1時間ずつ立って番をしなければならなかった。赤い小さなアリが死体にたかり、3日ほどずっと置いてあったので

す。その番を1時間ずつ、不寝番でしないとイケない。本当に沼津も綺麗に焼き払われてしまいました。

そのころ、サイパン島もやられるようになりました。私の友達も、サイパン島にいましたが、「死ぬまで島を守れ」と命令され、サイパン島を一生懸命守っていましたが、アメリカの兵器で、大勢の兵隊が死にました。大勢の人がそこで亡くなったのです。サイパン島を守っている兵士の中に、私の友達が1人いました。その人は、崖のようなところに逃れ隠れていました。動くものはなんでも食べたそうです。虫も食べ、命をつないだそうです。何とかして日本へ帰りたいたいと思ひ、石灰岩のような洞窟の中へ入って、命をつないでおったところ、アメリカの方から、「日本の兵隊さん出てきなさい、助けてあげるから穴から出なさい、」という放送が流れたそうです。「出たら日本人は殺されてしまう。男は全部殺される。女は連れていかれる」というように思ひ、穴から出ずに我慢していました。

そうするうちに、アメリカの兵隊が穴の上からチョコレートと落とし、そのチョコレートを食べることで、アメリカの兵隊に助けてもらう気持ちになったそうです。今年は私、その友達の寄せ書きのある日の丸の旗を持ってきていません。沖縄でも、「男は殺される」という思ひで、穴を掘って、爆弾、手榴弾を持って自分の身を守ったそうです。それでアメリカ兵は艦砲射撃で撃つ。火炎放射器を持って、バリバリ焼いた。そうして、日本の大勢の人が亡くなりました。沖縄の戦争の厳しさ、大勢の人が亡くなったのです。私の友達は、「おれはアメリカ兵が投げたチョコレートで助けられて、日本へ戻った。」と言っていました。

私は、沼津から、大隊本部がありましたので、神奈川県二宮へ移りました。「広島へ爆弾が落ちた」「日本へビカドンが落ちた」「原子爆弾だ」「大勢の人が広島で死んでしまった」という話が私たちにも入ってきました。日本は負けたという話です。「まだそれでも、負けられはしないぞ」と思っていました。アメリカのB29という、グラマンという小さい飛行機で狙ってきます。汽車が通るといふときに、二宮の駅を狙ってグラマンが降りてきて、汽車を狙うのです。私たちがそこにいたとき、女の人が事務所へ入ったとき、腹へ弾を受けて亡くなりました。

「8月15日の日に重大な放送があるから、それを聞くように」という命令があったので、私たちは役場のラジオの前でその放送を聞きました。8月15日、8時15分ごろでしたでしょうか。天皇陛下からの放送が流れて、初めて、戦争が終わったということを知りました。

その後、兵器は全部1カ所へ集めなければならないので、私たちは神奈川県ゴショノミヤというところに、馬も自動車も、銃器など全部集めました。すると、「里へ帰れ」という命令があり、私たちはすぐ、毛布1枚をもらってわが家へ帰りました。振り返ってみると、本当にみじめな戦争でした。本当に人権を無視した、みじめな戦争だったと私は思っています。

家内も外地へ出ていたのです。北朝鮮の元山いうところへ、父親の仕事のために家族そろって出ておりました。出ているうちに、父親が亡くなり、姉、兄も亡くなりましたが、住みやすいのでそのまま生活していました。

ところがソ連軍が侵攻してくるようになり、満蒙開拓に入っている日本人も次々と自決していきました。手榴弾を持って自分で命を絶っていったのです。日本に帰らなければいけないということで、元山にいた家内も妹と母親の3人で、元山を出ました。途中貨車に乗ったんですが、突然止まり、「女を出さなければ汽車は動かさない」という声がありました。銃声が鳴り、貨車は動かなかった。そのときに、「私らがいくから、皆さんは帰りなさい」と女の人が出ていき、貨車は動き出しました。その後、家内たちは、山を越え谷を渡り帰って行きました。

もう、頭の髪は男のように切り、顔に泥を塗ってひどい姿をして、38度線へ向けて歩きました。着いたときには、もう母親は足が立たんようになっていたので、私の家内が背負ったり、励ましながら歩かせたりしたそうです。釜山から船に乗って、博多へ着き、博多から汽車へ乗って新見に帰ってきました。

その家内は、脳梗塞で倒れました。病院で世話になりリハビリを受けて、何とか自分で生活できるような回復をいたしましたので、家へ連れて帰りました。私なりに何とか介護しなければいけないということで、平行棒を作って歩く練習をさせたり、食事やトイレを使う際の介護をするなど、面倒を見てまいりました。二人で支えあって生活をしていましたが、まあ、最後は老人ホームをお願いをしました。何とか元気になることだろうと思っておりましたが、この6月22日についに帰らぬ人になりました。私もちょうどその前に脳梗塞で倒れましたが、家内を見送ることができて良かったと思っています。

私は前から、世の中のために何かしたいと思ひ気持ちから、地域発展のために道路改良をしてまいりました。立派な道ができたので、県道の草刈りをして道の整備をしてきましたが、今は脳梗塞で十分できません。しかし、できる範囲でやっています。社会のためにどれだけできるか分かりませんが、これからもやっていきたいと思ひています。

言葉が十分出ないので、大変お聞き苦しかったことと思ひます。分からないようなことばかり申しましてあいすいません。ありがとうございました。

<菅田桂子さんから>

失礼いたします。皆さんが一生懸命聞いてくださったので、言葉が不自由になった父は嬉しかったと思ひます。みんなのた

めに、先ほど言ったボランティアを父は頑張ると思います。今後、父が生きていく上で、大きな励みになりました。そのことに対して、まずお礼を言いたいと思います。ありがとうございました。

私の心の中に父の言葉として、すぐ浮かんでくることがありますので、そのことを話したいと思います。それからもう一つ、皆さんにお願いしたいことをお話ししたいと思います。

父の話の中で、戦争とはとても大変なものだった。戦争のない世の中を、皆さん方にお願いしたいということです。皆さんに心がけてほしい、「戦争は駄目だ」というふうに強く思ってもらいたいことです。父からよく聞かされた話ですが、「自分(おまえ)の命はハガキ1枚、1銭5厘の価値だ、何ほでも代わりがある」と上官からよく言われたそうです。

それと、お腹を空かせて、ひもじい思いをしていたことが話のなかに何度も出てきました。それが泥棒したり人を騙したり、また、人を蹴落としてでも自分が生き延びようとしたりする、そういうすさまじいいろいろな出来事につながったところなんです。

それから、母や叔母は皆さんと同じ年ごろだったのですが、戦争で感じたことを叔母が歌集にまとめています。それから、母が何度も何度も話してくれたことを、もう少し具体的に伝えたいと思います。

先ほど、貨車に乗って逃げ延びようと試みたところですが、その貨車は、動いてたのですが、ある駅に来たときにピタッと止まりました。それとともに、「女を出せ」という朝鮮の人とソ連兵の声が聞こえたそうです。その声に、みんなは、「女は早く隠れろ」と言っていて、列車の片隅に寄せ、荷物をその上に乗せて隠そうとしました。そのうち、機関銃で貨車を撃ち、「女を出せ」と声が大きくなったそうです。その一触即発した状況の中、フラフラッと3人の女の人が立ち上がり「私たちが行きます」と、何かにとりつかれたように列車から降りていったそうです。みんな必死で止めたそうです。その女の人們が、外に出た途端、兵隊たちの叫び声とともに貨車は動き出したそうです。

そのときの悲しい思いが、母や叔母の心に残っています。自分が生きて日本に帰り、生活できているのは、あの3人の女の人の、その女の人の犠牲の上に成り立っていると。そのことは、叔母にとっても母にとってもとてもつらい記憶のようです。叔母は歌集にし、母は私に、いつか本にしようかなと言っていました。日本に帰ってきて、しばらくうなされたそうです。

ちょっと、叔母が書いている歌集を読みます。汽車の中に乗っているとき、そのときの情景です。「人間も獣のにおいを持つものか、家畜のように貨車に詰められ」。そして、「車輪きしみ、急停車せし衝撃が、床伝いきて、臓を揺さぶる」。急に止まったんですね。叫び声とともに汽車は止まる。そして、「銃声止み、ハングル詛りの日本語に、女出しなさい、汽車動くから」。そして、「女らが、白くタオルを頭に巻きて、ソ連兵へと、人かき分くる」。その女の人們は、日本に帰っても誰も知り合いはいない。先ほど言いましたように、商売で戦争の犠牲者となり、体を売っていた人ですね。「同胞の命を負って墮ちゆきぬ、娼婦の姿の聖女三人(みたり)は」。

私は、いつもこの部分で悲しくなるんです。母や叔母はさげすんで見ていた。だけど、本当は、その3人の方たちは聖女であった、という思いにずっと悩まされてきたようです。何度も何度も言いました。さげすんでいたことへの後悔、恥づかしさは、人間一人ひとりを大事にするという生き方になっていました。「どの人もみな同じだ」という言葉も、私の心の中に入っています。父も「一銭五厘の命」と言われたこと、すさまじい戦争の体験を私に語ってくれました。ですから、人を大切にしてください。人のことを考えて行動してください。そういう思いを伝えてくれています。

飢えていたり、それから人として大事にされていなかったという世代の人たちが、お年を召されています。人は、積み上げてきた生活経験から、いろんなことを考え、行動に移していくと思います。ですから、飢えていたり、また、人として大事にされていないことがあり、そのあと幸せな生活を送っていても、思うように体が動かなかったり、言葉が喋れなかつたりすると、ふっと苦しい体験を思い出して、自分がすごく虐げられているような気持ちになるものです。

施設や、病院に入っているお年寄りたちにそういう方がおられ、皆さんは関わっていくのではないかと思います。その方たちの人生を知ることが大切だと思います。そこで出会う人に、いろいろお話を聞く機会があると思います。忙しくて聞けないかもしれません。でも、これからはお年寄りが多くなるので、しっかり相手のことを知るといことを心がけてほしいと思います。そのことは、自分の中で、どういう支援をしたらいいか、どういう言葉をかけていいか、どういう行動に出ていいかということになると思います。そこを、大事にされて、これから出会う人たちのために頑張ってもらいたいと思います。

父は、農家の長男で頑張っていきたいと思っていたのですけれども、戦争により教育の道に入りました。「戦後、教員の勉強をするために、岡大に通った」と話します。また、岡大のそばを通るたびに、「ここで兵隊になった」。岡山のその地への思いがすごくあります。また、富士山めがけてB29が飛んできて、日本中に分かれていったという、富士山への思いも強く、その情景や沼津での兵役は忘れることができないのでしょうか。2年前に富士登山をしました。美しい富士山を眺めたので、今はきっと幸せになっていると思います。

人、それぞれの人生、自分が苦しい目に遭ったときに、いろいろな思いを持つ。そこを皆さんは理解して、出会った人の人生を知って頑張っていたらいいと思います。期待しています。ありがとうございました。